

是彼會員

アントニオ猪木氏を偲ぶ

伊大知重男（会員）

空襲でも焼け残ったビルが町中から一つ一つ消えていった昭和30年前後、庶民が渴望した身近な娯楽と時のヒーローはプロレスの登場によって実現した。

その関心度合いは、野球の巨人の選手の動静より断然上であつた。第一、子どもより大人の関心の方が大きかった。

テレビが一部で普及し始めたが、まだ街には野外テレビも都心に設置されていた。その未来的な新しい文明の利器であるテレビも一般家庭にとって、当然、高嶺の花であつた。価格は一流会社の課長職の月給の10倍以上したのではないか。ただ、客寄せに十分にその役割を持った利器のため、ラーメン店にはいち早く登場した。客の目当ては、力道山のプロレス試合を見るためにテレビ

ビのあるラーメン店に入つた。試合のある日はラーメン店の席を取る事が、すでに試合への興奮の序章でさえあつた。

浜町の先、人形町の近くの旧電電公社ビルの半地下にプロレスの練習場・ジムがあつた。通里から覗ける位置にあつたため、たまに時のヒーローを見つてに行った。でも、知っている顔はいなかつた。ヒーローに会えると期待した子どもとしては、力道山か、クルスカンプ、木村政彦、豊登あたりしか見分けることができない。その程度の情報量であつた、致し方ない。だが、ここに来ると、ますますプロレスが身近な「何か」となつていった。

昭和33年、兄昭司が米国に留学のため、羽田より飛び立つ日、偶然、生身の力道山を

空港ロビーで見かけた。赤いジャンパーを着たカッコいい人物であつた。別に周りに多くの人が取り巻いている風ではなかつた。それが、余計、周囲とは違つた雰囲気を感じ出していった。

威風堂々として、そして何よりもアメリカ的スマートさが感じられた。その力道山が見出した弟子であり傑物がアントニオ猪木氏であつた。そして後年、その業界の宝となり、長年、業界を越え永田町とピョンヤンにも聞こえたレジェンドであつた。

中国温州駐在より帰国した2009年、WAY2の福田氏に誘われた。氏曰く「六本木のクラブが今夜で閉める故、感謝のため、今日の飲み会はただである」。そこに一緒にしようとのことであつた。別に断る程もないと思い、福田氏の誘いに乗った。場所は、六本木アマンドの裏手の坂の途中のビルにその店はあつた。確か、夕方、6時ちょっと過ぎに入つたと記憶している。店に入ると、20人以上は入れる店なるも、

先客は3〜4人であり、開店直後の静けさと、照明を抑えた品の良さが漂っていた。1〜2杯水割りを飲んだ頃、福田氏が、他にあまり客がいない故、私に「カラオケ」をやるように、妙に勧めてきた。何しろ、私にとつての苦手なことの1〜2番が「歌」故、相当躊躇したが、福田氏のおだてが効いてきて、

それでは、1曲と、舞台仕様の台に立った。曲は坂本冬美の「火の国の女」である。まあ、これぐらいしか、他人に聞いてもらう「ネタ」はない私である。客が少ないことに勇気付けられ、カラオケを開始した。1番から2番に移る頃、店のドアが開いて、大男を中心に3〜4人が入つて来た。おお、その男の首には白い大きなマフラーが巻いてあつた。まさに、彼、アントニオ猪木であつた。私は2番から3番と、それなりに高音を出し、どうやら気持ちよく歌い終わった。やや、ホッとして自分の席に戻つたと同時に、前3〜4メートル前にいた巨漢、

アントニオ猪木が真面目な顔をして、目線を私に合わせて、両手を出し握手を求めてきた。彼の眼は穏やかな笑みをたたえていたが無言であった。私は瞬間的に「人違い、誰かに間違えての挨拶」と思った。が、私にもこやかに笑みを浮かべて失礼に当たらないよう、挨拶を返した。その後何杯か水割りを読み、福田氏のカラオケを聞き、そろそろ、私は帰り支度を始めた。その時、また、アントニオ猪木が立ち上がって、先ほどと同じように、にこやかに両手を出し握手を求めてきた。私は、また、無言で丁寧に戻礼し握手をした。福田氏は私が店を出る際に、アントニオ猪木にビンタをもらうため、一人残った。(当時、猪木のビンタを受けることで元気をもらい、加えて、とても光栄であることが流行っていた)。

その時から、数か月後、福田氏に仕事の事で会った時、お互い、先の六本木の夜の思

い出話をした。かねてからの私の疑問、「あの時の、猪木は私を誰に間違えていたのかな？」と福田氏に話題を振った。すると、私としては、信じられない事実が福田氏より聞かされた。「伊大知さん、猪木は誰か知人と伊大知さんを間違えたのではないのです。猪木が言うには、伊大知さんの歌に感動して握手を求めた、と言っていました」と、全く、驚天動地の事実であった。

「ええ、そうなのー」と絶句したことを覚えている。

実は、この六本木の稀有な驚いた出来事をさかのぼると、数年前、故あって韓国ソウルに行った。そのおり、かつての仕事の相手であったSK化学の幹部の人より、夜、一席を招待された。当時、ソウルで一番という「チョソンHOTELの寿司」をごちそうになり、そのあと、ナイトクラブに連れていかれた。その店は地下にあり、落ち着いた雰囲気を感じられた。客は、

すでに、20人以上おり、店はなかなか賑わっていた。我々も飲んで会話が進み、一服した時、たまたま、生バンドを背景に歌う客が途絶えた時であった。SK化学の彼は、何か歌えとしきりに勧めた。私は、例により、躊躇していたが、日本語であれば、他の客に余り迷惑をかけず、私の恥も、軽減されると勝手に解釈し、勇気が出てきた。生バンドの人は日本語に問題なしとのこと。それでは坂本冬美の「火の国の女」はできますかと聞くと、OKの由。これで決まり、歌おうとなった。こざっぱりした舞台へ、淡い光線に照らされながら恥じらいつつ立ち、バンドのいかにも、プロらしく歌い手を自然に乗せる伴奏に合わせて、声高に歌い始めた。特に歌詞の中にある「熱か」の語句は意識的に熱情を持って発した。言うなれば裂けくの気迫を込める気持ちで、力強く山場を創る気持ちで表現した。1番、2番

の最後尾は、私の声の特長の高音を目一杯伸ばして、残景を引きずらせた。3番まで歌い終えたと同時に、全く予期せぬことが起こった。店の客20人以上が全員立ち上がり、スタンディングオベーションと拍手をしてくれたのである。私は声も出せず、ただただ、啞然とした。このびっくりした出来事は、今、思い出しても「あれは本当に起こったことなのであろうか？」と不思議な想いとして、鮮明に記憶している。特に、SK化学の人が、とても喜んでいたことを覚えている。人生は、なかなか面白い出来事を私に用意してくれていた。

ソウルのナイトクラブの出来事が、ピョンヤンで、名を聞こえた猪木氏を六本木の夜で私に引き寄せたのである。

アントニオ猪木氏のあの柔らかく、大きな手の感触は、何とも表現しがたい温かみを、今なお、私に残している。